

日本の印刷史と装丁のおもしろい

東海大学附属図書館第50回展示会

2009年6月1日(月)～7月11日(土) *7月31日(金)まで会期延長

東海大学附属図書館
湘南校舎11号館図書館展示室

～ 最近の展示 ～

- 2004年 5月 むかしのくらし
11月 北條秀司の舞台
- 2005年 4月 歴史書は語る - ビザンツ帝国一千年の歴史と歴史書 -
6月 北欧の近代文学
11月 彩色本となった日本の古典文学 - 東海大学附属図書館蔵書展 -
- 2006年 6月 江戸の出版物と装丁あれこれ
11月 桃園文庫展 - 平安朝の物語を中心に -
- 2007年 6月 レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿を見る - 古代の知と技をめぐって -
11月 書画展 北條秀司をめぐる人びと
- 2008年 6月 附属図書館所蔵古地図展
11月 源氏物語展 - 語り継がれた1000年 -

展示にあたって

日本における印刷の歴史は、百万塔陀羅尼から始まる。これは宝亀元年(770年)に、称徳天皇の命を受け、百万塔の製作がなされた際、その塔の中に陀羅尼が印刷されて納められたものである。これは日本のみならず世界最古の、印刷年のはっきりした印刷物である。

その後、平安時代中期頃から、京都・奈良の諸寺で仏教の経典が木版で印刷されるようになり、鎌倉時代には寺院や宗派によって春日版、浄土教版、高野版、叡山版、東大寺版、西大寺版等と称される仏典の印刷が盛んになった。

鎌倉時代末期には、供養を目的とした出版から、高僧の語録や伝記等、または文学を中心とした出版へと移行していく。

中世末期になると、豊臣秀吉の朝鮮の役を期に、活字印刷術と銅活字が移入され、銅活字とそれを模した木活字により、活字印刷時代が約50年間にわたり隆盛することになる。これらの印刷物は、明治以降の活字印刷と区別して、古活字版と称されている。

今回の展示会では、そのような日本の印刷史の中で、本学が所蔵する代表的なものを展示した。また日本と海外の書物の、様々な装丁を紹介する資料も併せて展示した。

書物の印刷史について、より多くの皆様に興味を持ってご覧いただければ幸いである。

～ 印刷の種類 ～

* 今回展示されているもの

同じ製法でも時代や刊行された場所により、特定の呼び名を持つものがある。

木版 (もくはん) *

奈良朝時代から桃山時代(700-1500年代)まで行われていた整版(木版)による印刷術のこと。

春日版 (かすがばん) *

平安時代の後半期から、絶大な勢力をもった藤原氏の氏寺である奈良の興福寺で開版したもので、その支配下にある春日神社に奉獻したところからその名がある。そのなかでもことに鎌倉時代のものは質、量ともに優れ、厚様の料紙、漆墨の墨色、力量感にあふれる書風に特色がある。版木も多数伝存している。

古活字版 (こかつじばん) *

近世初期の文禄・慶長-寛永期(1592-1644)に刊行された活字印刷。天皇勅命による文禄・慶長・元和勅版。徳川家康の命による伏見版、駿河版。比叡山、高野山、本能寺などによる寺院版。本阿弥光悦等による嵯峨本などの私家版。営利を目的とした町版がある。

慶長勅版 (けいちょうちよくはん)

後陽成天皇(1571-1617)の勅命による開版。

元和勅版 (げんなちよくはん) *

後水尾天皇(1596-1680)の勅命による開版。元和7年(1621)の「皇朝類苑」をいう。

伏見版 (ふしみばん) *

徳川家康が慶長4-11年(1599-1606)、京都伏見の円光寺において臨済宗の僧で足利学校主であった閑室元佶(かんしつげんきつ 1548-1612)に命じて木活字を用いて出版したとされる。兵書を中心に「孔子家語」などの10種の漢籍を出版した。

駿河版 (するがばん)

徳川家康が伏見版に続き、駿河(現在の静岡)に退隠後に臨済宗の僧の崇伝(すうでん 1569-1633)、儒者林羅山(1583-1657)らに命じて銅活字を用いて開版した。元和元年(1615)の「大蔵一覽集」、元和2年(1616)の「群書治要」の2種のみ。

叡山版 (えいざんばん) *

比叡山延暦寺での出版。古活字版では慶長8年(1603)-寛永(1624-1644)中頃が最も盛んであった。寛永中期以降は叡山版を元にした町版での出版になっていった。

本能寺版 (ほんのうじばん) *

京都の日蓮宗本能寺において慶長末年(-1615)から寛永初年(1624-)にかけ開版された。

嵯峨本 (さがぼん) *

慶長期(1596-1615)の後半から、国文学書を中心に、ほとんど平仮名交じりの木活字本で刊行された。京都嵯峨の学者・書家である角倉素庵(すみのくらそあん 1571-1632)が、芸術家本阿弥光悦(ほんあみこうえつ 1558-1637)らの協力を得てつくった私家版である。出版地の名をとって嵯峨本と呼ばれるが、開版者の名から角倉本、あるいは版下が光悦の筆になるものを光悦本とも呼ばれている。多くは本文用紙の厚手の楮紙に雲母を引き、または雲母模様を摺り込み、あるいは五色の紙を用い、表紙にも雲母で花鳥などの模様をあらわしたり、染色をほどこし、すぐれた彩色の挿絵を入れた美しい本である。

銅版 (どうはん) *

平らに磨かれた銅板に線を彫り、そこにインクを詰め、強い圧力をかけて印刷する技法で、キリスト教の伝来にあわせて1700年代後半に日本にもたらされた。

1. 百万塔陀羅尼 ひやくまんとうだらに

宝亀元年(770)刊

1基

印刷年が明らかなものの中では、世界最古の印刷物(木版印刷か銅版刷かとの論争は、100年以上になるが、結着がついていない)で、奈良時代の宝亀元年(770)につくられた。塔は轆轤(ろくろ)細工でつくられ、3層の塔から成り、その上部は掘り抜かれ、その中に「無垢浄光大陀羅尼經」が収められ、そのふたとして「九輪のぎぼし」が栓になっている。

2. 摺仏：二重連弁阿陀仏座像 すりぼとけ：にじゅうれんべんあだぶつざぞう

平安後期(1100年代)刊

2枚 45×29cm

千体仏の摺仏は、死者の供養、病氣平癒や国家安泰を祈願し、仏や菩薩などの図像を刷ったもの。中国は唐時代から、日本では平安中期以降に流行したと言われている。ここに紹介した摺仏は、二重連弁阿陀仏座像である。

3. 成唯識論 じょうゆいしきろん

文永頃(1264-1275)刊

1帖 23cm

春日版

平安時代、京都における死者供養・病者平癒・延命のための摺經の流行に起原を持つもので、法相宗の根本書である。仏教信仰は、写經の功德を説くものが中心であるが、しだいに書写を行う者が増し、摺經へと転移していった。平安時代の後半から藤原氏の氏寺興福寺とその支配下の春日社で「因明正理門論」などが次々と開版された。これらの出版物を春日版と呼んでいる。

4. 大般若波羅蜜多經 だいはんにやはらみたきょう

応永17年(1410)刊

1帖 26cm

春日版

大乘仏教の初期の經典。サンスクリット原典・チベット語訳とも現存する。サンスクリット名はマハーブラジュニャーパーラミター・スートラ。全600巻。中国、唐の玄奘三蔵(げんじょうさんぞう)が顯慶5年(660)元旦から約4年をかけて翻訳した。「仁王(にんのう)經」「般若心經」以外の般若部諸經を集大成したもので、16部からなる。般若波羅蜜の義、諸法皆空の理を説いたもの。大般若波羅蜜多(はらみった)經。大般若經、大般若とも呼ばれる。

5. 観心略要集 / 源信著 かんじんりやくようしゅう

寛永3年(1626)刊

1冊 29cm

古活字版(叡山版)

平安時代中期の天台宗の僧、源信(げんしん 942-1017)作。比叡山天台宗の本覚思想に包み込まれた浄土念仏論。鎌倉期以降、現実肯定の風潮に伴って、このような念仏論が一般に受け入れられていく。

6. 貞観政要 / 吳兢撰 じょうがんせいよう

慶長5年(1600)刊

10巻8冊 31cm

古活字版(伏見版)

唐は貞観の時代の皇帝太宗(たいそう 在位626-649)と群臣との間に行われた政治議論を40門に分類編集したもの。徳川家康の文教奨励に伴い、木活字を用いて三要素の監督の下に、伏見の円光寺で印行したとされる。伏見版として最初に刊行された「孔子家語」(慶長4年(1599))に続き翌年刊行された。

7. 伊勢物語 いせものがたり

慶長13年(1608)刊

2冊 27cm

古活字版(嵯峨本)

嵯峨本の代表作となる出版物。木版の挿絵を入れ、色変わり料紙(いくつのも色の入った紙)を使用している。慶長13年(1608)出版後、何度も異植字版や木版印刷(整版)で増版され人気が高かった。本格的な絵入本である。平仮名交じりの古活字版。

8. 梅枝 うめがえ

慶長中頃(1600年代)刊

1冊 24cm

古活字版(嵯峨本)

「謡曲百番」の一つであり、題名は本文中の「梅が枝...」の記述による。展示資料は嵯峨本の特長が良く出ていて、表紙は雲母模様で鶴の絵がほどこされている。題簽には「むめかえ」とある。平仮名交じりの古活字版。

9. 源氏小鏡 げんじこかがみ

元和頃(1615-1624)刊

3巻3冊 19×28cm

古活字版

源氏物語の代表的梗概書。南北朝時代以降、連歌師達の間で「源氏物語」は必須教養となり、各巻の主要な場面、筋立てがある程度習得できるように工夫された「源氏小鏡」は江戸時代まで広く利用された。平仮名交じりの古活字版。

10. 日本書紀 / 舍人親王等編 にほんしよき

慶長15年(1610)刊

30巻15冊 28cm

古活字版

養老4年(720)に成立した舍人親王(とねりしんのう)等の撰による日本最古の歴史書。神代より持統天皇までの朝廷に伝わった神話・伝説・記録などを漢文の編年体で記述した。

11. 皇朝類苑 / 江少虞撰 こうちようるいえん

元和7年(1621)刊

78巻目録1巻15冊 28cm

古活字版(元和勅版 銅活字版)

宋の時代の史実・逸話など1000以上の項目を諸文献から集めて種類別に編集したものである。徳川家康が慶長11年(1606)に僧元信に銅活字大小9万余個を調達させ、皇室に献上した。後水尾天皇の勅命により、「紹興二十三年福建麻沙鎮」刊本に基づき元和7年(1621)に刊行された。中国ではすでに散逸しており、完全な本文を伝えるのはこの元和勅版のみである。

12. 天台三大部補注 / 従義撰 てんだいさんだいぶほちゆう

寛永3年(1626)刊

14巻14冊 29cm

古活字版(本能寺版)

従義(じゅうぎ 1042-1091)は中国宋代の浙江省永嘉平陽の人。「天台三大部」は「法華三大部」とも呼ばれ、この資料はその注釈書である。

13. 庭訓往来 ていきんおうらい

元和5年(1619)刊

1冊 28cm

南北朝時代から室町初期成立の往来もの。著者は玄恵(げんえ)とも伝えられているが詳細は不明。1年各月の往復書簡の形式をとり、手紙文の模範とするとともに、武士の日常生活に関する諸事実・用語を素材とする初等教科書として編まれ、室町・江戸時代に広く知れ渡った。擬漢文体。

14. 庭訓往来抄 ていきんおうらいしょう

寛永16年(1639)刊

2冊 28cm

展示No.13と同じく武士の日常生活に関する事項について書かれたもの。

～ さまざまなジャンル ～

* 今回展示されているもの

草双紙(くさぞうし) *

江戸時代小説の一大潮流をなすもの。大衆向きに書かれた絵入の通俗小説の総称で、表紙の色によって赤本・青本・黒本・黄表紙などと呼ばれた。次に現れる合巻(ごうかん)を含めて、草双紙と呼んだ。

赤本(あかほん)

延宝から寛延(1673-1751)頃に出版された草双紙の様式をいう。子供向けの御伽噺(おとぎばなし)を題材とした、絵を主としたものが主流だった。紙質も悪く読み捨てのものだった。

黒本(くろほん)

寛延(1748-1751)から安永3年(1774)頃の草双紙の様式をいい、表紙が墨によって黒色に色付けされていた。赤本について刊行された。同時期に表紙が萌黄色の青本も刊行されており、黒本は青本の再販本との見解がある。歌舞伎、浄瑠璃の絵解き、英雄一代記、化物語、好色恋愛物等の内容が赤本時代のものに加わり大人向けの読み物へと移行していった。

黄表紙(きびょうし) *

安永4年(1775)から文化3年(1806)頃、江戸時代中期以後数多く出版された草双紙の様式をいう。草双紙の青本のあとを受けて、表紙が萌黄色からより安価な顔料を用いた黄色へと変化していくため、黄表紙と称された。内容は当世の世相、風俗、事件などを流行語を交えて写実的に描写すると共に、ことさらに常識に反し理屈を排除して荒唐無稽な構想・表現による滑稽をもつばら狙ったもの。「通」と「無駄」すなわち洒落と機知によるおかしさをねらった、成人の漫画ともいべき作風がうちたてられた。

合巻(ごうかん) *

文化(1804-1818)以降の江戸時代後期に流行した草双紙の様式。読み物が長編になってきたため、それまで5丁を1巻とした薄い作りだったものを数巻を合わせ1冊にまとめるようになった。絵を主とした読み物で内容は仇討ち物、お家騒動物、歌舞伎物、中国小説・日本古典翻案物などである。装丁は錦絵摺付表紙など浮世絵版画の技術を駆使するなど、黄表紙が漉き返しの安い紙を本文に使っていたものに比べるとはるかに絵や色彩が芸術的になった。

読本(よみほん) *

赤本などの絵草紙に対して、文章を旨とする本の意。寛延、宝暦の頃(1748-1764)からのもの。洒落本などの淫猥な小説本の発売禁止にあった作者たちが、新天地を求めた結果生まれ出たもので、読み物を主とした。挿絵は人物の肖像など2~3枚を入れた程度で、怪談ものか中国の翻訳ものや、わが国の奇談・伝説を材料にとり、半紙判の5冊ものが多い。

洒落本(しゃれほん) *

江戸時代の小説形態の一種。享保(1716-1736)後半から始まり、文政(1818-1830)頃までに多く刊行された、遊里に取材する短編の小冊子(小本【こほん】)。遊客遊女などの姿態言動を、会話を主とした文章で写実的に描き、簡単な小説的構成をとるものが多い。

錦絵(にしきえ) *

浮世絵版画の史的展開の最終部に位置する多色版彩色画。幕末には報道性の強い時事風俗絵が多く生産され、明治中期まで及んだ。

瓦版(かわらばん) *

現代の新聞の号外のようなもので、ニュース性に富むさまざまな情報が報道された。ただし、全部が全部事実を伝えたとは限らない。より多く売るために内容を歪曲させ売ったものもある。瓦版の名称は粘土に文字や絵画などを彫って瓦のように焼いて原版を作ったところ由来する。当時は読売(よみうり)、または辻売り絵双紙とも呼ばれていた。

15. **五十三次名所図会 / 歌川広重画 ごじゅうさんつぎめいしよずえ**
 安政2年頃(1855)刊 5枚 37×26cm 錦絵
 江戸時代の画家、歌川広重(うたがわひろしげ 1797-1858、別名安藤広重)の画。錦絵、合巻挿絵などを執筆していたが、天保元年(1830)頃、一幽齋号で制作した錦絵「東都名所」シリーズから風景画に開眼。保永堂・仙鶴堂合版の「東海道五拾三次」挿物錦絵を發表し、好評を得て出世作となる。戸塚、藤沢、平塚、大磯、小田原を展示した。
16. **安政五年江戸火事消失場所絵図 あんせいごねんえどかじしょうしつばしよえず**
 安政5年頃(1858)刊 1枚 32×46cm(折畳12×17cm) 瓦版
 安政5年2月10日に、日本橋小田原丁付近から出火した火事の状態を知らせる瓦版。
17. **風俗浅間嶽 / 柳煙亭種久, 柳水亭種清作 ; 歌川国貞(2世), 歌川国芳, 歌川芳幾画 ふうぞくあさまがたけ**
 元治2年-慶応2年(1865-1866)刊 14巻14冊 18cm 合巻
 江戸後期の戯作者柳煙亭種彦(1783-1842)の読本「浅間嶽面影草紙」を抄録して合巻としたもので、江戸末期の戯作者である柳煙亭種久(りゅうえんていたねひさ 生没年不明)が初編-3編、4編-14編までを戯作者で僧侶でもあった柳水亭種清(りゅうすいていたねきよ 1823-1907)が著述したものである。
18. **西鶴織留 / 西鶴著 ; 団水編 さいかくおりとめ**
 正徳2年(1712)刊 6巻6冊 25cm 読本
 井原西鶴(いはらさいかく 1642-1693)著、北条団水(ほうじょうだんすい 1663-1711)編。団水は西鶴の弟子で江戸前期の浮世草子作家である。「町人鑑」、「世の人心」が収められている。江戸のさまざまな身分・職業の人心の諸相を描くが、小説としてのまとまりのない随想的な章が多い。
19. **絵本忠臣蔵 / 速水春暁斎作画 えほんちゆうしんぐら**
 寛政12年-文化5年(1800-1808)刊 10巻10冊 22cm 読本
 前編寛政12年(1800)刊、後編文化5年(1808)刊。前編は山東京伝の「忠臣水滸伝」に対抗して上方書肆が出版したもので、春暁斎自作画の絵本物の初作である。後編は三都書肆連盟で出版されている。赤穂義士の仇討を絵本物化したもの。
20. **鼻下長物語 / 芝全校作 はなのしたながものがたり**
 寛政4年(1792)刊 3巻1冊 18cm 黄表紙
 大名と家臣との言葉のやり取りの面白さを描くとともに、一方当時の子供たちの間で流行した、記憶しにくく、しかも早口で言いつらい長口上を、何度も繰返すうちに間違いをしておかしみを題材に取り入れている。
21. **金咲伊達驪 / 恋川春町縮綴, 月磨画 こがねさくだてのくろこま**
 文化・文政頃(1804-1830)刊 2巻2冊 18cm 黄表紙
 恋川春町(こいかわはるまち 1744-1789)は江戸時代中期の戯作者。駿河の小島藩・松平家の江戸詰用人で、藩邸のあった小石川春日町から恋川春町という筆名を付けた。江戸での黄表紙というジャンルを形作った人といわれる。この資料は義経一代記を黄表紙にまとめたもの。

22. **ゑせ物語 / 止働堂馬呑作 えせものがたり**
 天明2年(1782)刊 1冊 16cm 絵入洒落本
 「ゑせ物語」は「伊勢物語」をもじった似非(えせ)物語の意味である。江戸の「おかしおとこ」が、友と伊勢参宮の帰途、古市の遊里での遊びを夢見ることを書いたもの。
23. **虚実柳巷方言 / 香具屋主人著 きよじつさとなまり**
 寛政6年(1794)刊 3巻1冊 14×20cm 洒落本
 遊郭の客筋、得意芸の案内、四季の行事、遊郭内外の諸人物などが記されている。柳巷方言(さとなまり)とは遊女言葉のことである。それぞれの国訛りを改めさせるために吉原独特な言葉であった。
24. **人相指南 / 瀬山佐吉編 にんそうしなん**
 明治30年(1897)刊 1冊 18cm 銅版
 人相について詳しく説明したもの。明治初期に銅を版材として印刷された。
25. **日光山小誌 / 錦石秋編 につこうさんしょうし**
 明治20年(1887)刊 1冊 17cm 銅版
 日光参詣者向けの案内書。展示No.24と同じく銅を版材として印刷されている。
26. **相模国大隅郡大山寺雨降神社真景 / 歌川貞秀(橋本玉蘭)画 さがみのくにおおすみぐんおおやまでらあぶりじんじゃしんけい**
 安政5年(1858)刊 3枚 37×25cm 錦絵
 左端には江ノ島、右奥には富士山を望む大山神社を含めた、大山全景の3枚続きの錦絵。大勢の参拝者も描かれ当時の活気がうかがえる。
27. **相州大山真図 そうしゅうおおやましんず**
 明治35年(1902)刊 1枚 55×40cm 銅版
 展示No.26とよく似た地図。こちらのほうが後に製作された。
28. **横浜海岸通之図 / 歌川広重(三世)画 よこはまかいがんどうりのず**
 江戸後期-明治初期頃(1800年代)刊 3枚 37×25cm 錦絵
 「御開港横浜之全図」の異人波止場と日本波止場を拡大した図である。

29. 御開港横浜之全図 / 歌川貞秀著 ごかいこうよこはまのぜんず
安政6年(1859)刊 1枚 70×191cm 錦絵
安政6年(1859)頃の横浜港を子安の方から眺めた図である。
30. 御開港横浜外国人住宅之図 ごかいこうよこはまがいこくじんじゅうたくの
ず
江戸後期-明治初期頃(1800年代)刊 1枚 63×191cm 錦絵
横浜の外国人居住区の地図。イギリス、アメリカ、オランダ、フランス人の住居、商館の位置が分かる。前田橋を渡った左奥に外国人墓地も見える。
31. 絵入往来物版木 / えいりおうらいものはんぎ
天保13年(1842) 1枚 21×74cm 版木
絵入往来物の版木であるが正確な書名等は不明である。「天保十三年」と彫られている。
32. 洛東清水寺奉額抜句上座 / 蛙屋蛮太, 土筆新百等花評 らくとうきよみず
でらほうがくぬけくかみざ
江戸後期(1800年代) 1枚 14×49cm 版木
城南瓶川追善のため奉納した江戸後期頃の版木である。
33. 挿絵の木版
不明 1枚 8×14cm 版木
洋書の挿絵に使われた版木。

～ さまざまな装丁 ～

* 今回展示されているもの

懐紙(かいし) *

本来、貴族が日常身につける装束の懐中に、束ねた紙を携帯したことから「ふところがみ」の名称が生まれた。折り畳んで所持したために、別に「畳紙(たとうがみ)」ともいう。それが鎌倉時代頃から歌会の際に自作の歌を記し懐中にしたこと、から、「懐紙(かいし)」と呼ぶようになった。時代や身分により懐紙の寸法・折り方・書き方などさまざまな様式が見られるが、公的な歌会で披露される歌は必ず懐紙に書かれるという平安朝以来の伝統は、今も歌会始(うたかいはじめ)に息づいている。懐紙に書かれた連歌などは、折り目を切り、逸脱しないよう卷子本に改装されたものが多く伝わっている。

卷子本(かんすぼん) *

横に長くて軸に巻いた「巻物」のこと。書物の装丁としては最も古い形式で、東洋・西洋ともに行われた。日本には奈良時代に中国から伝わり、当時の絵巻や経巻などにその形が残っている。見たいところがすぐに見られないという欠点があった。縦に巻く掛軸も卷子本の変形といえる。

折本(おりほん) *

古くは卷子本から変形したもの。卷子本は開閉に不便なので、それを避けるため一定の幅で折りたたみ、屏風のように前後に折って冊子の形としたもの。卷子本より利用しやすくなったが、何度も繰り返し利用すると折り目が切れてしまうことがあった。日本には平安時代に中国から伝わった。

粘葉装(でっちょうそう) *

折本の欠点を補うために考案された。用紙を1枚ごとに二つ折にして、折り目(外側)に沿って5mmほど糊付けして重ねて貼り合わせ、表紙をつけて冊子としたもの。糊を用いて各葉を綴じつけるので粘葉と言う。厚い本には向かず、利用が多いと糊の部分が剥がれてばらばらになってしまうというのが欠点であった。本を開くと蝶の羽が開くように見えるため胡蝶装(こちょうそう)とも言われる。

列帖装(れっちょうそう) *

粘葉装の欠点を補うために生まれた方法。用紙を数枚重ねて二つ折にし、糊付けをするのではなく二折以上を糸でかがったもの。綴葉装(てっちょうそう・てつようそう)ともいわれる。

袋綴(ふくろとじ) *

表面(書写面・印刷面)が外側に、裏面(白)が内側になるように折り込み、折り目とは反対側の用紙合わせ目に沿って、上下2ヶ所をこよりで綴じたもの。形態的には1紙1紙が底抜けの袋状になるところから袋綴と呼ばれている。したがって粘葉装とは用紙の折り方、接合部が逆になる。綴じ目は4つ目が5つ目が通例で、4つ目は中国風、5つ目は朝鮮風である。

大和綴(やまととじ) *

平安末期から行われた装丁で、用紙を折らずに重ねて穴をあけ、細紐を通して綴じたもの。写本や大福帳に用いられることが多かった。列帖装・綴葉装を大和綴と称した例も多い。

縮緬本(ちりめんぼん) *

主に、日本の昔話を在留外国人に諸国語に訳させ、各頁見開きで木版手摺りの優雅な彩色画を入れたもの。英文・独文などの横文字用紙に絹の縮緬を連想させる柔らかな加工を施した「縮緬紙」を用いたもので、明治中期から大正期にかけて刊行され、外国人のみやげ物として海外にも売り出された。

34. **昌琢等山何連歌：元和元年霜月二十二日 / 里村昌琢他 しょうたくらや
まなにれんが：げんながんねんしもつきにしゅうににち**
元和元年(1615)写 4枚 38×53cm 懐紙(無綴)
句の中に「山」を読み込んだ賦物連歌(ふしものれんが)。百韻の連歌で、100句を連ねて一巻きとする形式になっている。懐紙4枚をそれぞれ半分に折り、折り目を下にして、その表と裏とに句が記されている。展示資料は改装されず、懐紙のまま残されており、めずらしい資料である。
35. **伊勢物語系図 いせものがたりけいず**
江戸中期頃(1700年代)写 1帖 18cm 折本
「伊勢物語」の系図。当時、作品を分かりやすくするために登場人物の系図をつくることがしばしばおこなわれた。種類の多い源氏物語の系図に反し、伊勢物語系図は比較的数量が少ない。
36. **源氏物語系図 / 三条西実隆著 げんじものがたりけいず**
江戸初期頃(1600年代)写 1帖 18cm 折本
「源氏物語」を分かりやすくするために作中人物を系図にまとめたもの。実隆は宗祇、肖柏等の協力を得て、系図を完成した。
37. **拾遺集 しゅういしゅう**
昭和49年(1974)刊 1冊 24cm 列帖装
拾遺集、寂恵本を底本とした復刻版。「古今集」「後撰集」に次ぐ勅撰和歌集で、三代集の一つである。
38. **伊勢物語 いせものがたり**
室町中期頃(1400年代)写 1冊 21cm 列帖装
室町時代の写本。
39. **万葉集：金沢本 まんようしゅう：かなざわほん**
昭和48年(1973)刊 1冊 22cm 粘葉装
万葉集、金沢本の複製。
40. **法性寺殿御集 / 藤原忠通著 ほっしょうじどのぎよしゅう**
昭和12年(1937)刊 1冊 25cm 粘葉装
法性寺関白藤原忠通(ふじわらただみち 1097-1164)の詩集。寿永2年(1183)の古写本で尊経文庫本の複製。

41. **紫式部日記 / 紫式部著 むらさきしきぶにつき**
 昭和55年(1980)刊 2冊 28cm 袋綴
 群書類従本の複製。
42. **紫式部日記 / 紫式部著 むらさきしきぶにつき**
 室町中期頃(1400年代)写 1冊 24cm 袋綴
 「徳岡小野馬蔵」印がある写本。
43. **源氏物語抜書 げんじものがたりぬきがき**
 江戸中期頃(1700年代)写 1冊 18cm 大和綴
 源氏物語の要語と歌を各巻ごとに抽出したもの。
44. **源氏略称 げんじりやくしょう**
 江戸中期頃(1700年代)写 1冊 19cm 大和綴
 源氏物語の梗概書。
45. **伊勢物語随脳 / 在原滋春著 いせものがたりずいのう**
 室町末期頃(1500年代)写 1冊 26cm 大和綴
 在原業平の二男である滋春(生没年不明)による、南北朝時代から室町時代初期に成立した伊勢物語の注釈書である。
46. **江戸切絵図 えどきりえず**
 嘉永2-安政3年(1849-1856)刊 28枚 切絵図
 おおむね現在の東京23区(外郭地域を除く)を区分した携帯の折り畳み分冊地図である。内容は詳細に記されており実用性を重んじて作られているが、全体として見ると形状は不正確である。彩色が派手なために人目を引いた。
47. **伊勢物語業平壽娛六 / 松亭金水作 ; 一陽齋豊国画 いせものがたりなりひらすごろく**
 江戸後期頃(1800年代)製作 1枚 37×73cm すごろく
 江戸時代の読本・人情本作者であった松亭金水(しょうてい・きんすい 1797-1862)作。この時代の絵師であった一陽齋豊国(=歌川豊国、うたがわ・とよくに 1786-1864)画。

48. **Rokkasen : the illustrated poems by the six poetical geniuses / 秋山愛三郎訳**
明治27年(1894)刊 1冊 19×27cm 縮緬本
印刷された絵を押し揉んで、あたかも縮緬布に描いた絵のような感じを出したもの。本書は六歌仙の歌に英文の翻訳のある縮緬本である。
49. **Nile voyage / Charles & Susan M. Bowles**
1897年 1冊 20cm 縮緬本
ナイル川の冒険物語。
50. **禁じられた本 / 城市郎著 きんじられたほん**
昭和41年(1966)刊 1冊 19cm
表紙に石が埋め込まれた装丁。
51. **書物の美 / 斎藤昌三著 しょもつのび**
昭和37年(1962)刊 1冊 22cm
見開きに印鑑をあしらった装丁。
52. **昭和蔵書票誌 / 伊藤喜久男編 しょうわぞうしょひょうし**
昭和16年(1941)刊 1冊 24cm
蔵書票を集めたもの。蔵書票とは図書館の所蔵者を明示するために、図書館の見返しなどに貼るラベルで、銅版、木版、石版などで趣味を凝らして刷られている。
53. **鍵のかかる部屋 / 三島由紀夫著 かぎのかかるへや**
昭和45年(1970)刊 1冊 24cm
小説の内容に合わせた装丁に仕立てられている。

54. 大江山絵詞 おおえやまえことば

江戸中期頃(1700年代)写

3軸 33cm

卷子本

「酒呑(しゅてん)童子」ともいわれる。丹波の大江山に住む酒呑童子誅伐の勅命を受けた源頼光が、平井保昌らと共に山伏姿に変装して丹波の国、千丈が嶽の「鬼が城」に潜入、童子らに毒酒を飲ませて討ち果たし、誘拐された姫君たちを救出してめでたく都に帰るという物語。また童子の住処を丹波の大江山から近江の伊吹山に移した伊吹山酒呑童子退治の物語(「伊吹童子」)も普及していった。展示資料の巻末に「絵狩野大炊助藤原元信」と書かれており、狩野派の流れをくむ人が書写したものである。

55. 七十一番職人歌合 しちじゅういちばんしよくにんうたあわせ

江戸後期頃(1880年代)写

3軸 30cm

卷子本

この歌合は室町時代に成立しており、当時の職人の様子を知ることができる貴重な彩色写本である。

56. 寛永三年九月六日将軍様御参内御行列次第 かんえいさんねんくがつむいかしょうぐんさまごさんだいごぎょうれつしだい

江戸中期頃(1700年代)写

1軸 29×2149cm

卷子本

行列図の部分彩色。江戸幕府三代将軍、徳川家光が寛永3年(1626)に後水尾天皇の二条城行幸を迎えるために、二度目の上洛をしたときの様子を記した卷子本。「寛永三年九月六日二條御城江行幸之時御楽御歌御会御解御進物之次第」を含む。

57. 東京名所鉄道馬車往復上野公園山下之図 / 広重画 とうきょうめいしよてつどうばしゃおうふうえのこうえんやましたのず

明治初期頃(1800年代)刊

3枚 36×24cm

錦絵

三代広重(1842-1894)による3枚続きの錦絵。天保(てんぽう)13年生まれ。明治27年に53歳で没。初代広重の門人。二代広重が師家を離縁になった後に婿に入り、自身二代広重を称した(実は三代)。本姓:後藤、後に安藤。画姓:歌川。横浜絵、東京名勝絵、文明開化絵を多く描いた。

58. 東京真景図会する賀町三ツ井組 / 広重画 とうきょうしんけいずえするがちょうみつぐみ

明治初期頃(1800年代)刊

1枚 36×24cm

錦絵

展示No.57と同様、広重の画。

59. 東京開化名景競品川蒸気車 / 国政画 とうきょうかいかめいけいくらべしながわじょうきしゃ

明治初期頃(1800年代)刊

1枚 36×24cm

錦絵

四代国政(1848-1920)による錦絵。嘉永元年生まれ。大正9年73歳で没。父である三味線方杵屋貞山の友人歌川国麿の紹介で国貞に入門し、その没後に二代国貞の門人となる。明治22年に三代国貞を襲名。本姓:竹内。画姓:歌川。展示No.57、58の広重と同じく開化風俗絵が多い。

60. **The Taj-Mahal and other historical monuments erected during the Mogul Dynasty / Robert Bignold**
 1975年 1冊 22×29cm
 タジマハールとモーグル王朝の間に立てられた記念碑の歴史。蛇皮を使った装丁で、タジマハールなどの絵をあしらっている。
61. **Lettera del Giappone degli anni 1591 e 1592 scritta al R. P. Generale della Compagnia di Giesu / P. Luigi Frois**
 1595年 1冊 16cm
 表紙に音符をあしらった装丁。
62. **A noble fragment : being a leaf of the Gutenberg Bible, 1450-1455 / with a bibliographical essay by A. Edward Newton**
 1559年 1枚 41cm 活版印刷
 印刷術の創始者グーテンベルクが発明した活版印刷術によって世界で初めて印刷されたラテン語聖書。1頁が概ね42行で印刷されているため「四十二行聖書」と呼ばれている。本書はその一葉である。
63. **Karandavyuha**
 1800年頃写 107枚 7×32cm
 金文字で書かれたサンスクリット語の仏典。散在しないように糸で綴じた装丁となっている。
64. **Сказка о золотом петушке / Александр Сергеевич Пушкин ; рис. П. Банина ; Pushkin, Aleksandr Sergeevich.**
 1975年 1冊 9×12cm 豆本
 ロシアの詩人プーシキンの「金鶏物語」。
65. **Последние стихи / Михаил Юрьевич Лермонтов**
 1975年 1冊 8×8cm 豆本
 ロシアの詩人レールモントフの詩集。「廠(y t e c)」他。

66. **В я р а / Н и к о л а В а п ц а р о в**
 1968年 1冊 6×9cm 豆本
 ブルガリアの詩人ヴァプツァロフの詩「В я р а (信念)」を29の言語によって翻訳されたもの。
67. **С т и х и о Л е н и е / р е д . Н . К р ю к о в**
 1967年 1冊 8×7cm 豆本
 レーニンやレーニン主義について書かれたもの。
68. **Sphinx(Papyrus)Exhibition abo_el_hol \$t nazlet el.samman Giza(Egypt)**
 1990年頃製作 2枚 20×30cm パピルス
 観光者向けに販売されているもの。
69. **Die zweiundvierzigzeilige Bibel / Johann Gutenberg**
 1578年 2巻2冊 43cm
 「四十二行聖書」の複製。鍵付きの豪華な装丁。
70. **The book of common prayer, and administration of the sacraments and other rites and ceremonies of the church, according to the use of the Church of England / Church of England.**
 不明 1冊 12cm
 キリストを描いた金属製の表紙に鍵がついた装丁。
71. **Collec ç am dos documentos, e menorias / Academia Real da Historia Portugueza.**
 1721-1736年 15冊 34cm
 見開きのマーブル模様の装丁が美しいシリーズの1冊。

参考文献

- ◇ 「日本古典文学大辞典」日本古典文学大辞典編集委員会編 岩波書店，1983-1986
- ◇ 「日本古典書誌学総説」藤井隆著 和泉書院，1991
- ◇ 「古本用語事典」久源太郎著 有精堂出版，1989
- ◇ 「和本入門：千年生きる書物の世界」橋口候之介著 平凡社，2005
- ◇ 「日本書誌学を学ぶ人のために」廣庭基介，長友千代治著 世界思想社，1998
- ◇ 「江戸の板本：書誌学談義」中野三敏著 岩波書店，1995
- ◇ 「ビジュアル・ワイド江戸時代館」大石学，小澤弘，山本博文編集委員 小学館，2002
- ◇ 「日本古典籍書誌学辞典」井上宗雄ほか編著 岩波書店，1999
- ◇ 「古活字版之研究」川瀬一馬著 Antiquarian Booksellers Association of Japan，1967
- ◇ 「国書人名辞典」市古貞次ほか編 岩波書店，1993-1996
- ◇ 「日本書誌学大系 67-3～67-5」近世文学読書会編 青裳堂書店，2000-2001
- ◇ 「戦国人名事典」阿部猛，西村圭子編 新人物往来社，1987
- ◇ 「書誌学：古文献資料に親しむ」杉浦克己著 放送大学教育振興会，1999
- ◇ 「源氏物語事典」池田亀鑑編 東京堂出版，1960
- ◇ 「洋学史事典」日蘭学会編 雄松堂出版，1984
- ◇ 「広辞苑 第4版」新村出編 岩波書店，1991
- ◇ 「浮世絵の鑑賞基礎知識」小林忠，大久保純一著 至文堂，1996
- ◇ デジタル大辞泉，ジャパンナレッジ (オンラインデータベース)
- ◇ 日本大百科全書(ニッポニカ)，ジャパンナレッジ (オンラインデータベース)
- ◇ 日本国語大辞典，ジャパンナレッジ (オンラインデータベース)
- ◇ 日本人名大辞典，ジャパンナレッジ (オンラインデータベース)

発行日 2009年6月1日
印刷 事務部 印刷業務課
発行所 東海大学付属図書館
〒259-1292 平塚市北金目1117
TEL 0463-58-1211 (代)

